

## 自立自助と相互扶助の精神

水野 衛夫

大平さんと私とは一橋を二年違いの卒業なので在学中は存じあげなかった。初めて言葉をかわしたのは安田生命の本社が日本橋から現在の新宿西口に新築移転した昭和三十六年の秋十月のことで、その披露の席に官房長官の大平さんが愛知揆一さんとつれだつてご来臨下さったときだった。その後、私が社長に就任した昭和四十四年六月の披露パーティーにもご多用のなかをお差し繰りご光来いただき力強い握手と激励の饒けを賜り、爾来格別のご高庇に与つてきた。大平さんにお目にかかる機会がふえたのは昭和四十七年三月、大平さんの高松高商時代からの親友で一橋では私と同期の長友赤城猪太郎兄からの「激務と過労の大平さんに仕事を離れて寛いてもらう会」を同期の有志で持とうとの呼びかけにに応じてできた「清友会」の集まりからで、十名前後の小人数である上に仕事抜きの気楽な会なので大平さんもこの会への出席を楽しみにされていたようだった。回を重ねることに、私は大平さんの心の温かき、信義を守り友誼を重んじる誠実な人柄に打たれて敬仰の念を深くしていった。

安田生命が昭和五十五年一月に創業百周年を迎えるに当たり記念の社史を刊行することとなり、編さん委員会で大平総理と社長の対談をもつてその巻頭を飾りたいとの企画が私のところに持ちこまれた。政務多忙な現職総理に、民間企業のような企画を願ひ出ることにはささかのためらいを感じたが、大平さんが内閣首班に選ばれた初の「第八十七回国会における施政方針演説」の氏一流の政治哲学に裏づけられた格調の高さに感銘し、特に「日本人の持つ自立自助の精神、思いやりのある人間関係、相互扶助の仕組みを守りながら、これに適正な公

的福祉を組み合わせた公正で活力ある日本型福祉社会の建設に努めたい」との言葉に強い共感を禁じ得なかった私は、「自立自助と相互扶助の精神」のテーマでは是非対談していただきたいと、森田さんを介してお願ひしたところ、幸いご快諾を得て実現した次第である。大平さんが一言一句もゆるがせにせず、その場の文脈のなかで一番適切かつ思慮深い言葉を選び出すために細心の配慮をされる方であることは、かねて耳にはしていたが、この対談の校閲であらためてそのことを教えられるとともに自分の表現の生硬稚拙なことを恥しく反省させられた。

その後、百周年の記念式典にも祝電をお寄せいただくなど数々のご高配に与った大平さんが、激務と過度の心労のために突然病に倒れ病床に臥す身となられたことを知り、私も会社社一同は一人驚きと憂慮の念を深く抱き、ひたすらに快癒を祈った。

私は異例の対談に応じて下さった大平さんにお礼の気持ちを伝えていただきたく編さん委員の代表と六月十日病院に見舞い、福川秘書官にお目にかかって病状を聞き、快方に向っているとのこととやや愁眉をひらいて帰社したところ、その翌々朝末明、病勢にわかには革まり快癒を願う人びとの祈りも空しく急逝の悲報に接し愕然とした。

小史は『生命の樹 安田生命の一〇〇年』と題して九月末出版され、珠玉の内容をもって飾ることができたが、ご在世中に間に合わずかえすがえすも残念でならない。十月初旬この小史をご遺族にお贈りして、ご生前のご好意に厚くお礼を申し上げるとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げた。

思えば大平さんとの交遊は短いものに終ってしまったが、温かな友情に支えられ、助けられて受けた恩義は測り知れないものがある。醇厚な友誼に報いるところもないままにわかに先立たれてしまい痛恨きわまりない。

この上はご遺志をつがれた森田さんを囲んで清友のつどいを末永くつづけ、大平さんのご懇情におこたえしてまいりたい。

(安田生命社長)